展覧会

『暮らしの中の造形展―田上絣と手拭』展示解説

須藤　護・蔭山　歩

展覧会に合わせて図録『暮らしの中の造形展―田上絣と手拭』を制作しました。制作には、1年間の民具調査に関わり、収集、聞き取り、実測、撮影など従事した学生たち4名が編集、執筆に参加しました。図録より展示解説に関わる部分をここへ転載します。

Ⅰ　田上のくらし　生産歴・生活歴

この展示は、主に田上の女性たちの暮らしを中心に構成した。女性たちは、地域や家族生活の中で中心的な役割を果たしてきたにもかかわらず、取り上げられることが少なかったこと、そして日々の生活の中から生み出され、使われてきた様々な美しい造形に惹かれたことが大きな理由である。

その代表的なものが「田上絣と手拭」である。今回は絣と手拭を中心にして、主に女性たちが作り上げてきた「織りと編み」の世界をたどることにした。また美しい造形の背後には、規則正しい1年間の生活サイクルがあったことを学んでいきたい。

田上の主要な生業は稲作であり、裏作として麦を生産してきた。春、土の中の虫たちが動き出し、木々の新芽が萌えいずる頃水田の耕起が始まる。4月中旬には種籾の選定が行なわれ、5月に入ると道普請、田の畦や土手の草刈り、ゆあげ（水田に水を注水すること）、苗代田の種まき、苗代で育った苗についた虫取りなどの作業がつづく。そして6月に入ると田植えが始まり、どの家も中旬頃までには植え終えて夏を迎える。

裏作に麦を作っていた頃は6月上旬に麦の収穫期を迎え、その後稲作の作業に移ることになる。また同じ頃に菜種の収穫がある。菜種は冬の間に空いた水田に種まきをしておくと、春には黄色の花をつける。3月、4月頃の田上の水田は、麦の緑と黄色の菜の花が一面に広がり、美しい田園風景がつづいていた。この時期から忙しい季節へと移って

いくが、心を和ませてくれる景観であった。

7月に入ると田の草取りが始まる。田の草取りは通常7月中にアラクサ、ナカドリ、アゲドリの3回行なうことになっていた。これを怠ると水田一面に草やヒエがはびこり、米の収穫に大きな影響を及ぼすため、稲作の重要な作業の1つである。

そして9月中旬になると早稲の収穫が始まり、10月上旬に中生、中旬には晩生の収穫がつづく。この間稲の乾燥、脱穀が行なわれ、文字通り猫の手も借りたい日々が続く。11月中旬頃までには米の収穫作業を終え、下旬に麦の種まきを行なって、この年の農作業を終える。

冬の間は農閑期になるが、女性たちの仕事は絶えることはなかった。正月を済ませると1年間に必要とする柴を山に取りに行き、男たちが作った薪や女たちが集めた柴を荷車に乗せて草津まで運び、正月や日常的に必要な品物、漬物用の大根などと交換して帰ってくる。また家族のために機を織り、着物を縫い、繕いものをする。その1つ1つが意味を持っており、家族生活を営んでいくために欠かすことのできない作業であった。（須藤　護）

Ⅱ　織り

1、糸を生み出す

糸を生み出す作業は、秋に収穫した綿の種を採るところから始まる。このときに用いる道具が綿繰り機である。綿繰り機は手動のものと足踏み式のものとがあるが、古くから使われてきた手動のものが使いやすいと言われており、収集されたものをみても手動式のものが大変多い。また実際に足踏み式のものを使ってみたが、やはり手動式に比べてやりにくかった。さらに、手動式のものには「播□　加古川清助」という記銘がされており、このような道具は記銘民具といわれている。これによってその民具の作られた年代や作られた地域、工場名などが示されている民具である。

奥田しめさんによると、道具は昔から使われてきたということなので、手に入れた経緯というのはわからなかった。しかし別の話者によると、手動式のものは村内でつくられたのではなく外から仕入れられたという。忙しくてこれらの道具を買いに行く時間がなかったため、これを卸した問屋が行商に来ていたという話を聞いた。またこの作業で取れた種は乾燥させて、次の年の春に畑に播いて秋にまた収穫する。

次いで種を取った綿を棒状に加工する作業を綿打ちといい、できた棒状の綿をこの地ではアメとよんでいる。この作業をおこなう際に使用された道具は牧では発見できなかった。アメの作成は桐生の職人に頼んでいたようだ。桐生は牧から東へ2km程行ったところにあり、紙漉や金箔の加工などもおこなってきた集落である。史料館で見せていただいた棒状の綿はとても完成度の高いものであった。桐生は田上全体の技術のセンター、あるいは職人の村としての機能をもっていたのではないかと考えられる。

このように、田上の地域をみると、技術の交流はひとつの集落だけで終わってしまうのではなく、中心となる集落を通して、それぞれの交流がおこなわれていたということがわかった。

さらに、このアメの状態から、糸車を使いよりをかけていく作業を経て糸作りは完成する。その後できあがった糸をカセの状態にする。カセとは染める前に、経糸を一定の間隔で巻いておく状態のことである。染めの作業は田上ではおこなわれていなかったという。それらは草津の方面などの外の集落に依頼していたという話を聞いた。その後染め上がりをゴコウダイで巻き、ザグリをつかって糸枠に巻きつけていく。この作業を「経糸巻き」という。

なおこの糸つみの作業は大変熟練を要するもので、その練習は少女の頃から習いはじめるという。この技術は母から娘へ、そして孫娘へと受け継がれていく。このような技術の伝承は軟質文化の大きな特性であろう。（越田 純市）

2、糸から布へ

糸から布へ織り上げていくには織機を用いる。しかし、織機で織り始めるためには「経糸巻き」「整経」「オサ通し」「綜絖づくり」「緯糸の準備」といった非常に複雑な作業工程を要する。

「整経」は、織機にかける経糸を準備する作業である。「整経」に用いるヘダイは「経糸をおなじ長さにそろえる道具」であるが、すべての経糸をおなじ長さ、おなじ張力でそろえなければならない。1幅（1尺）の布を織るには、繊維の太い木綿でも約350本、繊維の細い絹では約500本もの経糸が必要となる。手織りをやっていた頃に牧に住んでいた女性はこの作業を皆ができていたという。

次に「整経」した経糸をオサに通す「オサ通し」がある。「オサ通し」では無数にある

オサの目1つ1つに2本の経糸を通していく。その理由は綜絖を上下させ2本の経糸の間にヒを走らせて緯糸を通して織り上げていくためである。

田上郷土資料館で収集した11本のオサのうち10本はオサの目の数が350～400程度で、1本だけが500を超える目のオサであった。絹は高級な素材であるため、冠婚葬祭や他の村落へ行くとき、公の場へ行くときのような特別なときにしか着用しない。そのため、絹の織物よりも普段着である木綿の着物の方が数を必要としていたのである。

糸から布への工程をみていくと織機の作業が主要な作業であると考えられがちであるが、牧の織物に関する民具を調査・実測することによって、織機にかけるまでの工程がいかに大切であったかを実感する事ができた。

逆に、一見とても複雑そうにみえる織機による作業は非常にシンプルである。織機の基本的な構造は「経糸を開く、緯糸を打ちこむ」ことの連続作業を目的として作られている。地機（下機）や高機だけではなく、現代の非常に発達した織機も基本的な仕組みは変わっておらず共通しているといえる。

東江すまさん（大正3年生）が牧へお嫁に来たときは、姑とともに1日1反織らなければならなかったという。昔、村内のほとんどの女性が織れた絣と縞であったが、戦後手織りの文化は確実に衰退していった。

牧の奥田さん宅には、130年前に織られたといわれる端切れを継いで作った長持ちを覆う布（表紙写真）が今なお大切に保管されている。先祖から伝わってきた技術、そしてそれを大切にする心は現在において私たちが見直さなければならない非常に大切な文化であるように思う。（桜井　想）

3、絣・縞

田上の伝統的な作業着は絣と縞でつくられている。絣とは、あらかじめ染色した経糸と緯糸を交差させた際にできる柄をいう。絣には、白絣と黒絣があり、田上では白絣の方を好んで織っていたという。また、染めについては、現在の草津市志津に、織物関係の業者が集まっており、染めを専門にする業者に頼んでいたという。この染物業者が付近の村々をまわり、見本を持って注文をとりにきていた。

絣の紋様の大きさは、地域の女性にとって大きな意味を持つ。絣は、横に並んでいる紋様の数により2つ絣、3つ絣などと呼び、多いものになると16の紋様が並ぶ。大きい

紋様は若い人向きで、14、5才になると着用した。逆に、紋様が小さくなるにつれて地味になり、横に並ぶ紋様の数が多い程年配の女性が着用した。

年配の女性が大きな紋様の絣を着ていると、「あの人は5つ絣をしてらる」などと揶揄されることもあったようである。田上在住の奥田しめさん（大正3年生）の姑の奥田はるさん（明治11年生）は、生前92才の時に16絣を着ていたという。ハルさんは、「わしは牧の一番年寄りやから年相応のものをしているのや」といっていたという。（「民俗文化第88号」滋賀県民俗学会）

絣は、仕事着や田上特有の三幅前垂れ、手拭などに用いられた。仕事着は主に木綿が使われ、絹を使用して織った絣は、花嫁衣裳などの特別な場面に用いられた。

縞とは縞模様の織物をいい、主に縦の直線の模様が多い。更に、縦横に直線が交差する紋様、いわゆる格子柄もある。縞の直線の模様は衣服に用いられ、絣と同様に模様が大きいもの程年の若い人が着ていた。格子柄については、布団用として多く使われていた。また、縞の織物にも絹が織り込まれているものがあり、これは花嫁が嫁入りの際に持参する衣装であった。

田上では、女性が暮らしの中で重要な仕事を多く担っていた。その中の1つである織物は、少女の頃から親に習ってきたもので、自分の着るものは自分で織る習慣があった。例えば、嫁ぐ際に持っていく衣装は、長い期間をかけてコツコツと織ったという。また、花嫁衣裳などの特別なものは、地域の中で高い技術を持っている人に頼んで織ってもらうこともあったようだ。

このように、小さな時から織物を暮らしの中で行ってきた女性たちは、苦労して織った布を何度も別のものに仕立てなおしながら、長く大切に使ってきたのである。絣、縞の繊細な紋様は、この地域の女性の手によって受け継がれてきた田上の文化をあらわしている。（田邊 真未・豊田 悠）

4、仕事着

仕事着は文字通り作業着のことである。しかし日常的に使用する仕事着の中にも、女性たちの細やかな心配りがみられる。秋から春にかけての作業着は、白い襦袢の上に膝のあたりまでの袢纏を着て、三幅前垂れ（後述）をしめる。手拭を頭にかぶり、首にも巻く。手足を保護するために足にはハバキ（脚絆）、手にはテオイ（手甲）をつけるのが

女性の標準的な作業姿であった。

このほかに丈の短い袢纏があり、これを着る場合は下に股引を履く。戦後はモンペが出まわるようになって、ずいぶん活動的になったという。夏の間の仕事着は単衣の袢纏を着るが、さらに暑くなると袢纏を脱いで白い襦袢を上着代わりにした。

田植えの時の衣装は格別であった。早乙女は真新しい絣の袢纏に華やかな帯を締め、真紅のたすきをきりりと締め、前垂れの上からにやはり赤い尻当て（後述）を締める。手拭もテオイもハバキも真新しいものを着用する。雨のときや日差しが強いときは菅笠をかぶった。とりわけ若い女性たちは目いっぱいおしゃれをしたのである。このような姿をみると、田植えは単なる作業ではなく、田の神を迎え、田の神に奉仕をすることでこの年の豊作を願う儀礼であったことが理解できる。（須藤　護）

5、三幅前垂れ

「三幅前垂れ」は、絣のひと幅の反物を縫い合わせて三幅にしたもので、90cm余りの巾である。この前垂れを締めると尻までがすっぽりと包まれ、袢纏を保護するとともに汚れから守った。丈は膝の上までの長さである。縫い合わせた部分にはスリットを入れるので、作業の邪魔になることはないが、田植えのときなど田に入るときは、尻あてを締めて前垂れの端を挟みこんで作業をする。尻あてはそのための細い紐のことである。

「三幅前垂れ」は袢纏を保護するものであるが、山仕事や田仕事において、汚れることが予想されるときには、さらにこの前垂れを保護するための前垂れをつける。これを「あてまえだれ」といい、一幅半の前垂れである。丈も三幅前垂れより短く作っている。仕事着に対する田上の女性たちの細やかな配慮がうかがえる。

すでに、「4、絣・縞」で解説しているように、三幅前垂れに用いた絣には多様な文様がみられ、それが単に美しいだけではなく、年齢を重ねることによって文様が小さくなっていく。その中に年齢に応じた女性の「わきまえ」があらわれており、地域社会においては、自らの立場を示す指標になっていた。年齢や立場に応じた振る舞いが求められたのである。（須藤　護）

6、田上手拭

手拭もまた作業着の一部として、また女性たちを飾る小物として活用された。女性たちは田仕事、山仕事、そして日常生活においてはもちろん、冠婚葬祭、寺詣り、公式の集会などの時も、手拭を被って参席した。公私の場を分けることなく手拭を離すことはなかったという。皆が機織りをしていた時代は、白木綿を織ったときにでる端切れを利用して手拭として利用していた。その後明治・大正の頃から「田上手拭」として京都や大阪の業者が作るようになり、手拭の中でも高級品として、また特定商品として知られるようになったという（『民俗文化91号』滋賀民俗学会）。

田上手拭は独特の味がある。手拭の下3分の1ほどまで麻の葉、七宝、枡目、蔦、濁江、網代、花菱の文様、またその複合文様をあしらい、上部の白木綿地には楓、麻の葉、蝶、こうもり、薔薇、桜、水仙、桐などの文様を効果的に散りばめている。センスの良さをうかがわせるデザインである。このうち、大柄の蔦は若い女性、麻の葉や濁江などは主婦、網代などの小柄のものはお年寄り向きであり、ここにも年齢や立場による使い分けがみられる。

手拭は文様に関係なく公私ともに使われるが、新しくおろした手拭は公的な場で、古くなると作業用として用いるという。

手拭の被り方も特別公私の区別はない。春から秋にかけては1枚の手拭を被って後ろで縛る、もしくは髪とともに後ろで固定する。また年配の女性はすっぽりと被ることが多いようであるが、若い女性は前髪をみせるように少々上向きに粋な被り方をしたという。また、作業に出る時は首にもう1枚巻いて虫を防ぎ汗を拭きとる。山行きの時や冬期間は、その上からもう1枚被り、防寒と危険防止に役立てた。

田上の女性たちが、常に手拭を用いたのは、それが伝統的な装いではなかったかと思う。田植え衣装が物語るように、儀礼の際にはおろしたての仕事着を整え、美しく着飾ることが庶民の正装であった。その中に手拭が含まれている。正式な場に出る時は糊をつけ、しわがほとんどみられないような手拭を被る人があった。それは日常用いる手拭とは全くの別物である。古い形正装は新しい着物であり、それが古くなると作業着として使用してきたことは日本各地でみることができたし、中国南部や東南アジアの少数民族の間においても共通した考え方があった。田上の女性たちは、無意識のうちに古風な伝統を守ってきたのではないだろうか。（須藤　護）

Ⅲ　暮らしの中の道具

1、女性の仕事

ここでは、日頃田上の女性たちが使ってきた道具類を取りあげる。農家の仕事は多岐にわたっており、それぞれの仕事の役割分担をすることで、農業も生活も成り立ってきた。女たちの役割は、織物、編み物のほかに、稲作、畑作、草刈り、木の葉掻き、柴刈り、保存食品の加工など様々なものがあった。

農業は田上の生業の柱であるが、稲作における女性たちの主な作業は、種籾の選定、種まき、田植え、草取り、稲刈り、籾干しなどがある。力仕事を伴う作業は男が行なうが、女たちはその補助者としての役割を担った。そのほかに畑の作業があった。稲作に比べると畑作の比重はぐっと小さくなるが、古くは綿や菜種の栽培があり、裏作として麦を作った。

農耕のための道具としてミツグワ、ヨツグワ、ヒラグワ、マドグワ、ジョレンなどの鍬類がある。これらの鍬類は畑の耕作と水田の耕作を兼ねているものもある。腰を深く曲げて耕作するヒラグワもあるが、多くは立ち姿で行なう柄の長い鍬が多い。

雑草がよく茂る日本において、草刈りは農耕の主要部分を占めており、女たちは陰の力としてこの主要部分を担っていた。また石油、ガス、電気等が普及する以前は、薪や柴、落葉が主なエネルギーとして使用されていた。薪作りは男の仕事であったが、柴刈りや落葉掻きは女の仕事であり、薪や柴は自家用であるとともに商品として交易された。荷車に載せて草津の山田まで運び主に大根と交換した。また山田からも大根を積んで田上まで来る者がいて、薪や柴と交換していったという。田上は米の主産地であって畑が少なかったこと、草津は山が離れていて薪や柴が不足していたことがこの交易を成り立たせた。

草刈や柴刈りに使用されたのはカマである。カマにはオトコガマとオンナガマがあり、前者は刃先が分厚く柴、笹、小枝などの刈り取りに使われた。後者は薄刃で比較的軽いカマであり主に草刈に使用された。この名称から男女の作業分担があったことが推測できるが、実際は女たちが柴刈りの際にはオトコガマを使っており、両方のカマを使いこなしていたのである。このほかに枝打ち用の大型のカマ、稲刈り用のノコギリガマがある。

畑作用具として「ホクセ」「ホゲッショ」などとよばれるＴ字型をした豆植え用の道具

がある。長さは20cmにも満たない小型の道具で、T字の先端が尖っていてこれで土に穴をあけて種をまく。この道具は万葉集にも歌われている古い道具であるといい、農具の歴史を探っていく上でも興味をひかれる。（須藤　護）

2、柿渋

たわわに実った赤い柿の実は、秋の風物詩の一つであり人々の心を和ませてくれる。また冬の到来がまぢかであることを告げる風景でもある。このような柿とは別に、夏の間に青いうちに取ってしまう柿がある。直径が3cmから4cmほどの小さな渋のつよい柿で、ふつうマメガキとよんでいる。入梅が終わるころこの柿をもいでヘタをとり、臼で搗いて細かく砕いて、麻や木綿で作った袋に入れて汁をしぼりだしていく。これが柿渋であり一種の塗料として使用されてきた。柿渋は甕の中に入れて陽のあたらないところで保存しておくと何年でも使うことができた。マメガキは柿渋をとるために育てていた地方もある。

一般の家庭では竹籠や紙の箱に和紙を何枚も貼り付け、その上に柿渋を塗って容器として用いた。和紙は厚めに張った方が長持ちするので、何年もかけて貼ったものだという。柿渋を塗った容器は虫を寄せ付けない、腐りにくいという性質があるので、衣類を保管するための行李や長持に使われたほか、書類箱や大切なものを入れる箱などに使われた。柿渋が多用されてきたのは、実用的な面がある一方で渋い落ち着いた色彩が日本人に好まれたものと思う。漁村においては漁網の腐食防止に使われていた。（須藤　護）

3、藁細工

家族が必要とする履物を作るのもまた女性の仕事であった。秋に脱穀を終えた藁をツシ（屋根裏）に保存しておき、比較的農作業が忙しくない7月から8月にかけて、草履、草鞋などの作業用の履物を編んだ。藁細工はその日の仕事が終わった夜、家の前庭に筵を敷いてその上でおこなった。藁細工をする前には、藁を鎚で叩いてしなやかにしておかなければならない。また、1日に5足を編むことが標準であったので、嫁さんは姑とともに、夜がふけるまで作業用の履物作りに精を出した。

夏の夜は蚊が多く出た。現在のように殺虫剤や蚊取り線香がない時代であったから、モロ（ネズミサシ）を山から切ってきて細かく割り、米ぬかを入れた火鉢でくすべて蚊

を防いだ。モロは香りのいい木で、燃やすと煙をたくさん出して蚊を追い払ってくれた。作業用の履物（草履）は、年間に150足から200足ほどで間に合ったが、このほかに冬用の履物として、ゲンベイ（スッペ）やオソフキワラジ等があった。たいへん興味深いものに牛の靴がある。牛が蹄を痛めないようにという配慮からであり、農家にとって牛は家族同様に扱われていたことがわかる。昭和30年頃からゴムゾウリが普及しこの作業はなくなった。（須藤　護）

4、竹細工

身近な存在である竹は、縦に細く割れる性質があることから、さまざまな民具の素材に使用されている。その中でも竹の皮をヒゴにして編んだカゴは、洗いカゴや運搬カゴなど種類が豊富だ。

そのひとつにケラカンゴ（菜種カゴ）がある。上田上では、六月頃、乾燥させた菜種を刈り取りし、田んぼの中で種と殻に支分ける。種は油に、種ガラはケラカンゴへ入れ、燃料や牛の飼料にする。種ガラは、カゴいっぱいに押し込むように詰め、横にして転がして運んだという。

ケラカンゴは、直径965cm、高さ1020cmと大変大きいが、女性でも簡単に頭に持ち上げられるほど軽い。編み目は大きく、ヒゴをねじって強度を高めた 6つ目編みで編まれており、頑丈なカゴ に作られている。竹ヒゴをねじりながら編むには技術がいるため、同型のコナハカンゴと共に業者から購入していた。

柿とりに使うバランサオは、竹竿の先を二股にした簡単な形だが、軽く、柿を 落とさずとる事ができ、今でも毎年女性の会の干し柿つくりに使用されている。

ウエやビクなどの漁労用具、クダ・シンシバリなどの機織り道具をみると、竹という素材を知り尽くし、用途に合わせた形、家族の体に合せた形が生み出されている。その知恵と造形力は、今日のプロダクトデザイン技術に劣らないものであり、造形の原点だと感じる。（蔭山　歩）

Ⅳ　豊かな自然の恵み

周囲を山で囲まれた田上には豊かな自然からの贈り物がある。春は多種多様な山菜が芽吹く時期であるが、その中でもワラビが好まれた。畑では菜種が新しい葉を出してお

りこれを摘み取って漬け、秋になると食卓にあがった。

近年ではその蕾を摘んで菜の花漬けというおいしい漬物が新たな食品として加わっている。初夏になると大戸川ではアユの友釣りがさかんに行われた。夏から秋にはウナギ、コイ、ナマズ、フナ、ドジョウなどが、川や池で捕獲される。これらも毎日の食卓を飾る。ナマズの蒲焼きは特においしかったという。

秋にはカキ、クリ、キノコなどより一層豊かな恵みがもたらされた。人々は山田と山の境にカキやクリを植えて収穫した。この地方には5種類ほどの柿の種類があり、種なしの渋柿は干し柿にするが、自家用であるとともに商品としても貴重なものであった。秋の産物の中でもキノコの話は圧巻である。皆が好んで食べたのがクロコ、ヌノビキ、ネズミノアシ、イクチ、マツタケなどで、それぞれが鍋もの、味噌漬け、焼き物、蒸しもの、などの食材として好まれたが、その収穫量が中途半端ではなかった。マツタケなどは1日でバケツに何杯もとれ、毎日のおかずや弁当のおかずになり、いやというほど食べさせられた、という話が昔話になって久しい。（須藤　護）

V　伝えたいこと

この展示を通して、学生の皆さんや、広く一般の皆様に伝えたいことが3点あります。

第一点目は、「もの」を通して生活の歴史を学ぶことは楽しいものであり、その中から様々な問題を発見することができることです。

このことについてはすでに本文で述べていますが、上田上に残っている機織り用の「オサ」は目の粗いものがたいへん多く、日常の着物用として麻や木綿が織られていたことがわかりました。また目の細かい「オサ」も何点かみられることから、ハレの日のために用いる絹着物を織っていたこともわかりました。絹の織物は通常、近所に住んでいる機織りの上手な人に頼むことが多く、そのため一般の家庭では目の細かいオサの数が少なかったのです。そして織物は、古くは地域の中で技術伝承がなされていたことも理解できるようになりました。

第二点目は、この図録は女性の生活を中心に構成していますが、女性の立場や役割が大きく変化している今日、「進歩」とは何か、「発展」とは何かという問題を、田上の女性たちが作り、用いたモノが具体的に教えてくれていることです。女性たちは実によく働いてきました。ときには過酷な労働も余儀なくされたと思います。しかしながら、経

済的にはさほど豊かでなかった生活環境の中で、身の回りにあるものを賢く活用し、実に豊かな世界を築いてきたことがわかります。絣、手拭い、作業着などをじっくり観察してみると、ただ美しいだけではなく、創造力、造形力のすばらしさを感じ取ることができます。

第三点目は、地域社会で熟成された生活文化は、広い世界とつながっていることを感じることができることです。たとえば絣は東南アジアでも美しいものが織られています。暖かい地方では年間を通して繭の生産が可能であるため、絹が日常の衣類として多用され、その歴史は日本より古いことが推測されます。また縞も同様に、東南アジアの島々から伝えられその名がついたたとされています。ところが、東大寺の正倉院には唐の時代に伝わったという赤絣の織物が保存されています。このことから、日本に伝わった絣の技術は大陸、および南の島々からの流れがあったことが推測できます。田上の女性たちが織っていた絣は主に木綿でしたが、その文様は東南アジアのものと共通したものがあります。

また、今回特別に藁細工を展示していますが、日本人は藁で靴や長靴を作り、帽子、マント、カーペットなど、多種多様なモノを作ってきました。民俗学者の宮本常一は「藁という素材は粗末にみえ、また革製品や羊毛のように耐久性がないので見落とされがちであるが、西洋の文化とある意味で同質のものをもっていたのではないか。明治以降、日本人は西洋の文化を積極的に取り入れ定着させていったことと、何らかの関係があるのではないか」と述べています。この仮説は、文化の同質性と異質性について、一度考えなおしてみていいことだと思われます。異文化理解を深めていくとき、その相違点を明らかにしていくことは重要ですが、その一方で共通点を見出していくことはさらに重要なことだと思います。違いばかり強調してみても、互いに共有できるものは少ないことは明らかだからです。

私たちは、この民具から発信されているメッセージを素直に受けとめ、どこにどのような問題が潜んでいるのか、さらに考える力を養っていきたいと考えています。（須藤護）

参考文献

『民俗文化　88号』、滋賀民俗学会、1971年／『新修　大津市史9　南部地域』、大津市役所、

1985年／『田上の民俗』、田上郷土史料館、1971年／『創立二十五周年記念誌　我がふるさと』大津市上田上学区シニアクラブ連合会、1993年／『上田上の生活体験談集成』上田上百周年記念実行委員会、1990年／『上田上のガイドブック』ガイドブック編集委員会・大津市、1987年／『日本常民生活資所叢書　第一巻』、三一書房、／武部 善人『綿と木綿の歴史』、御茶の水書房、1989年／小宮山 勝司『ヤマケイポケットガイド15　きのこ』、山と渓谷社、2000年／伊沢 正名『キノコ』、文化出版局、1983年／丸山 尚敏、会田 民雄『ポケット図鑑　山菜』、成美堂出版、2000年／

執筆者

須藤　護　（里山ORC研究スタッフ・国際文化学部教授　企画・編集）

蔭山　歩　（里山ORCリサーチ・アシスタント）

田邊　真未（龍谷大学国際文化学部卒業生）

「いただいた出会いに感謝し、牧の人々の暮らしから感じ得たものをずっと大切にしていきたいです。」

豊田　悠　（龍谷大学国際文化学部卒業生）

「民具に触れる事でそれを使った人々の思いや歴史に少しでも近づけた気がした。この出会いに感謝。」

櫻井　想　（佛教大学文学部人文学科卒業生）

「真光寺の東郷さんをはじめ、牧の皆様、この度は本当にありがとうございました！」

越田　純市（佛教大学文学部人文学科卒業生）

「田上の過去の生活の歴史に触れることで価値観などが変わったと思う。本当に貴重な体験だった。」